未来に向かって伸びる鶴嶺の子

鶴小だより 冬休み号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長　日高　大司郎
令和６年１２月２４日発行

バウンダリー、同意、って・・・何

先日、子どもを守る会に参加したとき、本校の保護者の方が、ご自身のお子さんが富士スーパーの前で、「案内してほしい」と声をかけられ売り場を案内したという話を聞きました。親御さんは、親切にできたことはよいけれど、もし不審者だったら、不審者である可能性もあったと心配されていました。僕も同感です。今の時代、「もし・・・不審者だったら」ということを考えておく、子ども自身もそれを分かって行動できるようにしておく必要があると考えます。とても残念なことではありますが・・・。

今、僕の手元に「子どもを守る言葉『同意』って何？～ＹＥＳ、ＮＯは自分が決める～レイチェル・ブライアン　作　中井はるの　訳」という本があります。後期の始業式にこの本の中から「バウンダリー（境界線）」についてお話しました。「バウンダリー」は、自分を守るために、それから他者を守るためにも、親も子どももしっかりと理解しておくべきものだと思います。今日は、この本の内容をご紹介します。

この本は、まず、子どもたちに対して、キミはキミという「世界にたったひとつだけの大切な国」の「王」みたいなものだと言います。だから、この国（自分）をどうするか決めるのは自分なのだと伝えます。

次に、「王」である自分は、自分のバウンダリー（境界線）を決めることができると宣言します。聞き慣れない言葉ですが、この「バウンダリー」とは、「境界線」。大丈夫だと思えることと、これは嫌だと思うことの間を分ける、見えない線みたいなものなのだそうです。そして、「バウンダリー」は、ひとりひとり違う、相手によっても違う、時によっても変わるものだと伝えます。

ちょっと実際のケースを考えてみましょう。例えば、ある人が「フライドポテト食べる？」と差し出したと想像してください。差し出したのが家族であれば、迷わず食べますよね。親しい近所の人だったら、もらうかもしれません。でも、まるっきり知らない人がどうぞと言っても、食べる人は少ないと思います。このように、相手によってこの境界は変わってきます。同じような状況でも、自分自身の気分で対応が変わることもありそうです。

では、この境界線どうやって決めればいいのでしょうか。作者は、「キミが思うように決めていい」と言います。重ねて、**自分のからだをどうするかも自分で決める**、そしてこれを「からだの自己決定権」と呼ぶということも教えます。

例えば、親戚のおばさんが親愛の気持ちから「こっちにおいで、プニプニほっぺをツネツネさせて」言ったときも、それを決めるのはやっぱりキミだと言うのです。と同時に、時には安全や健康のために自分で決められないこともあると押さえます。駐車場では、大人と手をつなぐとか、病気を直すために薬を飲むなどが例としてあげられていました。

それから、子どもたちが自分で決めるために、「**からだで感じる直感を見逃さないで！**」と言います。誰かが自分に近づいてきて、いやな感じがしたら構わず逃げるなど、**イヤっていう気持ちを言葉や行動で示していい**。もし誰かが、自分のバウンダリーを踏みにじってイヤなことをしてきたり、その人の思い通りにしようとしたりしてきたら、**信頼できる人に相談するとよい**とも伝えます。

そして、自分がする側の時のことも、きちんと書いています。人によってバウンダリーは違うのだから、何かをするときは、相手が何に「同意」しているか聞いてみようと言うのです。自分がしようということに相手が賛成なら、「いいよ」と言う、それが同意。同意がもらえないならやめるんだと、お互いのからだにかかわるときは、とくに大事なことだとも伝えます。

そこで、こんな例も出しています。道を渡ろうとしている高齢者を助けようと思った時、それはよいことだけれど、助けてほしくないひともいる。何かをするときには相手の同意をもらわないとねと説きます。同意には、大切なことが２つあるそうです。**１．自分がどう思っているか相手に話すようにすること。２．相手の気持ちや想いをよく聞くようにすること。**それは、自分が全然気にならないことだとしても、とってもイヤな気持ちになる人もいるからだと言うのです。なるほどですよね。

この同意という考え方、子どもを守るという視点もそうですが、円滑な人間関係を築くという視点からも大切なことだと思います。子ども１人１人は、それぞれに守られるべき存在です。そして、子ども１人１人に想いがあるのです。そこをうまく調整するキーワードが、それぞれがもつ「バウンダリー」であり「同意」なのではないでしょうか。僕ら、大人はどうでしょうか。全く同じことだと考えます。人にはそれぞれ「バウンダリー」があり、それぞれの「同意」を尊重する必要があるのです。この考え方、親子で大切にしたいものです。